

[読書ノート]

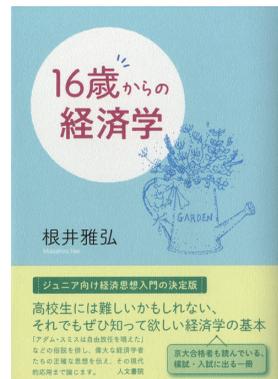
## 資本主義と経済思想の多面的理解を促すために —— 根井雅弘著『16歳からの経済学』をめぐる散策 ——

塚本恭章

「シュンペーター、ハイエク、ケインズという20世紀経済学の巨星たちが21世紀に生きる私たちに何らかの示唆を与えられるとすれば、それは『他者』との切磋琢磨によってみずからを向上させる態度を身につける以外にはないのではないのでしょうか」

(本書第二部, 185頁, なお傍点は評者による)。

若いジュニア世代のために著者がかつて書き下ろした新書3冊を合作し直した本書は、経済学の歴史をバランスよくかつ正確に学ぶために編まれている(各3冊の表題は、『経済学はこう考える』、『20世紀をつくった経済学』、『経済学の3つの基本』)。「16歳」の高校生にはレベルの高い難しい内容がたぶんに盛り込まれているが、著者の根井氏によれば、3冊をあらかじめ「読破」して京大に入学した生徒もいるようだ。意欲と知的関心の高いジュニアならそれも可能なだろう。ジュニア世代による経済学の思想や理論の正確な理解を促すべく、多くの時間と労力を費やした著者の心意気に敬意を表したい。



本書は大学生の入門テキストとしても推奨できる優れた一書になりうるが、時系列的に経済学の歴史を綴った構成ではないため、一定の予備知識が必要といえるかもしれない。「経済学史」という分野はひときわ奥が深い学問分野であり、人物や学説を丸暗記してその本質が「理解できる」ものではない。それだけ「正確に学ぶ」というのは難しいことなのだ。本書をつうじてそのことを実感でき、くわえて経済思想史や経済学史という学問分野がなぜ存在しうのかという根本的な理由を垣間見るよすがともなればよいであろう。

本書をとりわけ特徴づけているのは、経済思想の多様性を尊重する氏のスタンスをふまえ、現代経済思想史における「諸学派」や「諸概念（市場、貨幣、競争、均衡、資本主義）」、社会・経済「諸問題（豊富ななかの貧困、格差・不平等、環境破壊、バブルや金融危機）」について、マーシャル、ケインズ、シュンペーター、ハイエク、ジョーン・ロビンソン、ガルブレイスら時代を彩る偉人らの肉声とともにコンパクトに概説しながら、主流派と異端派との対話促進の役割など、多くの重要テーマが雄大なストーリーのごとく語り直されていることであろう。著者は冒頭「まえがき」にて、「ビジネス書の類にも経済学史の俗説がけっこう幅を利かせているので、大人が読んでも得るところはあるはずだ」という。「大人」に限らず専門的研究者が通読しても興味を惹かれ、参照に値する内容が多いのではないだろうか。

ここであえてその内容のいくつかを列挙してみよう。

1. アルフレッド・マーシャルを始祖とするケンブリッジ学派の研究者集団（ケインズ、ピグー、ロバートソンら）がいわゆる「果実を求める学問」としての経済学（「実践性」を重視した経済学）というマーシャルの掲げた理想に忠実であったこと（33頁）、進化論の影響を受けたマーシャル自身、経済学はしだいに「経済の進化（進歩）」を解明する方向に進んでいくべきものとみなし、主著『経済学原理』のなかで「経済生物学」という名称を用いていること

(24-25 頁)。

2. いわゆる「静態」と「動態」という二元論からなるシュンペーター経済学の「静態」と「動態」の区別がまさに哲学者アンリ・ベルグソンのいう「外的自我」と「内的自我」の区分にきわめて類似していること (120 頁)、さらにまた、シュンペーターがフリードリッヒ・ニーチェの影響も受けており、彼の思想が「ニーチェ的な英雄主義」の世界に近づくという故森嶋通夫氏による見解 (124 頁)。

3. ケインズ『一般理論』が哲学者 G・E・ムーアの「有機的統一の原理」と深いつながりをもっており、醜いからこそ失業を憎んだケインズは失業問題の早期解決をへて、ムーアのいう内面的価値のあるものをもっとそれ自体として存分に享受できうる世界の構築をめざしていたこと (62 頁, 169 頁)、過去 40 年間以上に及ぶマクロ経済学の超新古典派化 (たとえば吉川洋氏が「新古典派経済学の「終着駅」と称する、反ケインズ革命の中核を担った「リアル・ビジネス・サイクル (= 実物的景気循環) 理論など) の持続的趨勢を想起するとき、「修正された自由主義」者であるケインズ (の精神) を引き継ぎ、マクロ経済の安定とミクロ経済の効率性のあいだのバランスをつねに配慮していたサムエルソンの「新古典派総合」という思考法が (氏自身によれば) もっと評価されるべきであったこと (165-167 頁)。

4. 数理経済学者や社会主義の中央計画当局が概して重視するところの「科学的知識」と異なり、社会主義経済計算論争においてハイエクは、社会において分散的・局所的・断片的に存在するいわゆる「現場の知識 (= 情報)」に注目し、それらの「伝達・発見メカニズム」としての価格システムの機能的特性を見出したこと、そしてさらに進んでハイエクはまた、競争をそうした「現場の知識」や人々の意見の「発見・形成のための装置 (手続き)」と捉え直し、新

古典派の完全競争概念や一般均衡理論に代替しうるオーストリア学派に独自の市場プロセス論への道を切り拓いたこと (133-136 頁, 183-184 頁)。

5. 異端派・制度派経済学者として知られるガルブレイスが『ゆたかな社会』(1958年)をつうじて、主流派経済学では「通念 (= 制度的真実)」とみなされている「消費者主権」に対して「依存効果」という概念から鋭い疑問を投げかけ、そして「依存効果」が主要原因となって稀少な諸資源が民間部門に優先的に配分される結果、公共部門が著しい貧困状態に放置される傾向があることを「社会的バランス」の欠如と呼称したこと (195-197 頁, 232-233 頁), などである。

むろん上記以外にも注目内容はあるにちがいない。それゆえ本書を精読していけば、そこには経済学史の未来や 21 世紀の経済学のありかたをも想起させる、そんな新鮮な息吹が汲み取れるのではないだろうか。上記の各トピックスについて簡潔に解説されている本書の内容をあらためて詳述し直すのは野暮というものであり、以下では、主に経済学史ないし現代経済思想史をめぐる氏のスタンスに着眼しながら若干の批判的考察を中心に述べることにしたい (なお本稿での括弧付きの挿入文章は『16 歳からの経済学』からの引用である)。

\*

第一部「経済学はこう考える」にある、ケインズの高弟ジョーン・ロビンソンが唱えた「経済学者にだまされないこと」、そして著者が説く「時流にながされないこと」は、今日においても変わることなくきわめて貴重な示唆に富んでいる。異端派の左派ケインジアン代表として正統派の「主流派経済学」批判を粘り強く実行し、有名な「経済学の第二の危機」(1971年)を高らかに表明したジョーン・ロビンソンによる「経済学者にだまされるな」というモットーは、根井氏によれば、「『正統』、『異端』を問わず、たとえ著名な学者や研究者の言うことであっても、それを鵜呑みにすることなく、まず自分の頭で徹底的

に考えてみることをすすめる教訓として捉えるとよいのではないのでしょうか」と総括されている。そしてまた、「みずからの関心分野をしっかりと押さえておかなければ、それら（外国の流行や他人の関心 評者）に振り回されるだけになりかねないと注意を喚起しているのです」という指摘も、「時流にながされないこと」の実質的内容として傾聴に値する。こうした姿勢を確実に醸成していくためにも、「多様な経済思想」を謙虚にかつ正確に学ぶことが有意義なのだ。

第三部「経済学の3つの基本」は第一・二部につらなる応用編として位置づけられ、内容的に専門度を増している。いうまでもなく氏は苦心して「3つの基本」に「経済成長、バブル、競争」を選抜したはずだが、とはいえ、その理由や意図についての説明がやはり必要なのではないか（3つの選定それ自体にはとくに異論はない）。

冒頭「まえがき」において氏は、「より進んだ経済思想の素養があれば、経済史や経済論壇の動向もより正確に理解できるようになるということである」と述べてはいるが、それは、上記の3つを選定した理由や3つの基本トピックスの相互関連についての説明とはいえないだろう。本書の第一・二部の流れからすれば、むしろ「市場・貨幣・資本主義」のほうがよいし、それこそが経済学のもっとも重要な基本概念にして、現代においてなおもっとも論議されるべき内容をなしている。グローバリゼーションやグローバル資本主義の功罪をめぐる論戦は経済史や経済論壇においても活性化し続けており、それらの評価については「市場」や「貨幣」のあり方が決定的な重要性をもつからだ（西部忠『資本主義はどこへ向かうのか 内部化する市場と自由投資主義』NHKブックス、2011年や岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、2020年等）。経済学の体系的発達が本書でも主要テーマのひとつとして通底している「資本主義」経済の自己認識の歩みとして開始されていることに照らし、「市場経済、格差、分配」、あるいは「貨幣、労働、制度」でもよいであろう。いうまでもなく経済学の「3つの基本」の候補はそれこそ無数にある

にちがいがなく、このようなことは、著者自身も百も承知のはずだ。「経済成長、バブル、競争」の3つは重要な概念にはちがいないが、その重要度は、第二部で「シュンペーター、ハイエク、ケインズ」の3人を選定するのとは大きく意味合いが異なっているにちがいない。

くわえて本書は「古典派の競争観」を復活させた「スラッフアの理論」で締め括られている。価値と分配の問題に新古典派の需要側ではなく古典派の生産側からアプローチし、新古典派限界理論に対する根底的批判をおこなったピエロ・スラッフアによる『商品による商品の生産』（1960年）の経済学（史）における顕著な貢献は評者自身も高く認めるところである。とはいえ、スラッフアが大学の通常の「経済学史」講義で扱われることはほとんどないであろうし（かりに扱われるにせよ、古典派のリカードが残した「不変の価値尺度」問題を後世に解決した人物として若干言及される程度だろう）、スラッフア体系とそこにおける「古典派への復位」にもとづく古典派的な競争概念 最大利潤率をもとめて自由に各産業間を出入りする資本の可動性 は、その理論的意義と射程をふくめ本書の紙幅ではあきらかに説明不足だと思われる。古典派の競争概念、新古典派の競争概念（完全競争ほか）、オーストリア学派のハイエクのな「知識の発見の手続き」としての競争、そしてマルクスによる資本主義進化ヴィジョンを組み込んだシュンペーター的な「革新＝イノベーション」という創造的破壊としての競争など、「競争」概念そのものについての「経済思想の多様性」を尊重する氏の見解には同意できるが、氏自身、現代のグローバル資本主義においてはスラッフアを含む「古典派の競争観」のほうが新古典派の「完全競争」を基準にした競争観よりも現実的妥当性をもつと本書末尾でさらりと述べていることからして、そのような印象が拭えない。本書のつとに強調する「正確に学ぶ」、そして「正確に理解・評価する」べく、既存の競争概念（および市場・資本概念）をめぐる立体的精査が欠かせないはずだ。ジュニア高校生や一般読者に限らず、専門的研究者に対しても不案内ではないだろうか。

第三部の主題をめぐっていささか異論が長くなったが、むろんこれはまとも

な「建設的」異論にほかならない。いずれにせよ、スラッフア理論や競合的学派における「競争」概念の多義性の意義などについて、紙幅の制約がたしかにあるとはいえ、より詳細な概説が必要ではないかという点にここでの評者の主張は尽きている。「経済学史」講義を大学で担当する者として、そうした諸内容を講義全体のなかにどう位置づけるか、評者自身もあらためて考え直してみたい。

＊

したがってジュニア高校生に限らず、「経済思想の多様性」というものを「正確に把握する」のは必ずしも容易なことではない。というより、それが意味し含意するものを深く探究していくと、実際のところそれはきわめて難しい営為なのだ。「経済学史の中からできるだけ多様な思想を学び、みずからが経済問題を考察するときの参考にしてほしい」という氏の見解はたしかにその通りなのだが、われわれがさらに進んで知りたいのは、そもそも多様な経済思想をできるだけ多く学ぶことにはあきらかな限界が生じうるし、なにより多様な経済思想そのものをどうお互いに連関させ有機的かつ批判的に統合していけるか、そのヴィジョンと方法が明確にならない限り、「経済思想の多様性」を尊重するといってもそれはしごく当たり前の主張にとどまり続け、「経済思想の多様性」論の新たな深化と発展に結実していかないのではないかということである。こうした指摘はジュニア向けの本書の守備範囲を超えるものかもしれないが、論理的に帰結されうるものであり、経済学史の未来にむけたあり方を展望する際に避けては通れない。この点はのちほどにも少し言及されるだろう。

本書にて氏が警鐘を鳴らしている「原理主義」的思考に陥ることなく、経済現象の本質を根源的に理解すべく多様な思想・学説の成り立ちを知り、そこから現代的・現実的諸問題に的確にフィードバックさせることは、経済学が「社会科学」（猪木武徳氏は近著『経済社会の学び方 健全な懐疑の目を養う』中公新書、2021年において、「社会研究」という名称を用いている）である以上、重要な作業となる。このような観点からみても、第二部「20世紀をつくった

経済学」においてシュンペーター、ハイエクそしてケインズを取り上げ、簡明ながらも三者をあらためて比較検討し直すことは、これまでに膨大な研究蓄積があるにせよ、けっして輝きを失うことはないだろう。第二部第一章に「資本主義の本質を求めて」という文言があるように、20世紀的構図としての「資本主義対社会主義」は今世紀の21世紀に「資本主義対資本主義」、「資本主義の多様性」論へ変容し、グローバル化した自由放任主義や新自由主義のあり方と限界をふくむイデオロギー対立が一段と先鋭化してきている。それゆえまさに「資本主義の本質」とは何かは、依然として21世紀的な課題であり続けており、われわれはそれを「求めて」いかねばならない(昨年刊行されたウルリケ・ヘルマン『スミス・マルクス・ケインズ よみがえる危機の処方箋』みすず書房<sup>1</sup>、いずれも2021年刊行の日本経済新聞社編『逆境の資本主義 格差、気候変動、そしてコロナ……』やシリーズ化した丸山俊一他『欲望の資本主義 5 格差拡大 社会の深部に亀裂が走る時』東洋経済新報社<sup>2</sup>などは、現代の資本主義をめぐって幅広い多面的観点からその特質と変容の諸相を論じ直している)。ベストセラーとなった斎藤幸平『人新世の「資本論」』(集英社新書、2020年)に代表されるように、19世紀の経済学者・思想家マルクスの学説も多面的に見直され続けている。

著者と異なり、評者は「シュンペーター、ケインズ、ハイエク」の順で20世紀経済学を論じるだろうが(まさにこの順序で20世紀の支配的経済学は変転し、彼らの経済学にもとづく資本主義もまた変質していった)<sup>3</sup>、こうした順序のあり方には、氏が「実質的な便宜」ではなく「抽象的な正義」を重んじたハイエクより、「修正された自由主義」の支持者のケインズやサムエルソンの「新古典派総合」を実践的指針として高く評価することもおそらく関わっているように。

\*

それでは、これからの経済学史や経済思想史のあり方にむけてより具体的に、われわれは何をどうしていけばよいのだろうか。「ひとつの解答」がすでに用

意されている。本書で簡明ながらも丁寧に概観されている、現代資本主義におけるシュンペーター的な「革新＝イノベーション」の意義、ハイエク的な「市場・競争・知識」論と「自由主義」論の射程、マクロ経済学の骨格をなすケインズ有効需要原理の根底にある「貨幣」と「不確実性」のあり方、さらにはジョーン・ロビンソンが重要視した「歴史的時間」の特質など、氏が第二部第四章で示唆しているように、これからも一定程度の学問的な寛容性を共有しながら、「他者との相互交流」を多元的に推進していかなければならないということである<sup>4</sup>。多様な経済思想・理論を正確に学び理解するとともに、かつそれらを批判的に捉え直すことによってこそはじめてそれは可能になり（その際、本書でも着眼されている、異端派のガルブレイスが喝破した「通念（＝制度的真実）」の存在が念頭に置かれることとなるう）、われわれはそこから経済理論・思想（史）の深化についての新たな「再発見」が可能となるのだから。

たとえばNHK・BSで年始に放送され今や広く定着した「欲望の資本主義」シリーズのもつ大きな魅力のひとつは、古典や経済学における偉人らの肉声（スミス、マルクス、シュンペーター、ケインズ、ハイエク、第5弾のカール・ポランニーとヴェブレンなど。日本を代表する世界的経済学者の故宇沢弘文や宇沢を師とするジョセフ・スティグリッツ、岩井克人も登場してきた）を彼らが生き抜いた時代背景や歴史的文脈に当然のごとく留意しながらも、まさに「現代の資本主義」ないしは「現代の資本主義と民主主義」が直面しうるさまざまな問題群と真剣に「突き合わせる」ことで新たな潜勢力や今日的意義を見出そうと努めていることである<sup>5</sup>（なお余談だが、著者は第三部の巻末箇所「経済思想の多様性」のなかで、「ベルリンの壁の崩壊後、いまや『資本主義』という言葉は敬遠されるようになり、『市場システム』とか『市場経済』とかいう当たり障りのない言葉が多用されるになりました」と述べているが、30年前の冷戦構造の終結後はたしかにそうであったかもしれない。ただ第三部刊行の2013年以降も「資本主義」を表題に掲げる一般書・学術専門書は、それこそ数多く世に問われ続けている<sup>6</sup>。今日において氏のいう上記の状況はむしろ

る逆転しているのではないか。刊行当時の著書をそのまま再録している以上、かつてと今とで齟齬が生じうるのはやむを得ないとはいえ、この点にも補足的説明がないと読者に誤解を招く恐れがあるだろう。

さて話をもとに戻せば、著者自身がこれまでの作品でも注意を促してきたように、経済思想の安易で軽率な現代への援用は逆効果を生み出しかねないが、それでも「経済学史」や「経済思想史」という学問分野はたんに 過去・歴史にとどまらず、すぐれて 現在・現代（そしてまた、いささか困難ではあるが 未来）への関わりをつうじるなかでこそ、新たな威力と輝きを発揮すべきものではないだろうか。岩井克人『経済学の宇宙』（日本経済新聞社2015年初版、日経ビジネス人文庫2021年復刊）における第8章「残された時間 「経済学史」講義からアリストテレスを経て「言語・法・貨幣」論に」がきわめて特徴的かつ説得的に描き出しているように、「経済学史の存在意義」もまたあらためて広く再考の余地があるといえよう<sup>7</sup>。

\*

本稿はたんなる書評の域をこえてやや論述内容を評者なりに拡充させながら、本書における著者のスタンスをどう活かし鍛えていくべきかということを常に念頭に置いてきた。一義的で普遍的な解答などおそくない。だが、経済学という「社会科学（社会研究）」がその出発時から考察対象としてきたのが「資本主義」であることをひるがえって想起するとき、「経済思想の多様性」論を活かすための大きな学問的課題のひとつに、古くて新しい「資本主義の本質」があることは確かなところであり、そのことを最後に強調しておきたい。

経済学史や経済思想史をふくむ「経済学」という「学問」は何のために存在し、そもそも何を解明するためのものなのか、あらためて深く問い直されるべき時代にわれわれは生きている。膨大な先行研究の蓄積があるが、これにも一義的で普遍的な解答などおそくない。とはいえ、故宇沢弘文氏が1960年代後半に米国から帰国以降、人間らしいゆたかな社会の実現にむけて「社会的共通資本」の考え方を一貫して説き続けたことを想起するとき、そこには岩井克

人氏の宇沢弘文追悼文「故宇沢弘文先生が目指したもの」において、それがまさに「『冷徹な頭脳』より『暖かい心』」と総括されていることも示唆に富む（日本経済新聞朝刊、2014年9月29日掲載）。「人間の経済」や「人間の心」を大切にしたい経済学とはどのようなものなのか。現在、持続可能な経済成長・開発目標（SDGs）やESG（環境・社会・企業統治）投資といった現代的文脈などにおいて、宇沢弘文の経済思想にふたたび高い関心と注目が寄せられていることも念頭に置きたい。

本書『16歳からの経済学』において最初に登場する第一部第一章のタイトルは「冷静な頭脳と温かい心」。ケンブリッジ学派のモラルサイエンスの良き伝統とその始祖アルフレッド・マーシャルが高らかに宣言した「冷静な頭脳と温かい心」<sup>8</sup> という精神を21世紀においても忘れることなく、社会と歴史の未来を切り拓いていくとりわけ若い世代は深く思索しながら、さらには健全な批判的思考（ないし猪木氏のいう健全な懐疑の目）をも養いながら、ぜひ本書をじっくり読み進めてみてほしい。評者自身もまた、経済学史や経済思想史という学問分野への知的関心をさらに広げ深めながら、古典と現在（歴史と現代）を架橋させる学問のあり方を真剣に考究していきたいと思う。

## 注

- 1 本書の著者であるヘルマン氏は著名な女性ドイツ人ジャーナリストで、「欲望の資本主義」シリーズに出演経験もある。その著者によって、スミス、マルクスそしてケインズという、「この三人だけが自分の学問分野の座標軸を新たに定義しなおした」（11-12頁）と率直に述べられている。2008年のリーマン・ショックに端を発する世界金融危機後も世の中を依然として跋扈し続ける主流派の新古典派経済学に対する批判を含め、「資本主義」そのものについてわれわれは深く知り、さらに探究を重ねなければならないとヘルマンはいう。本書は三人の人物の「伝記」としても大変興味深く読める作品だが、各々が生き抜いた時代のなかでの彼らの経済思想・理論の形成過程、そしてそれらの現代的特質と意義がきわめて鮮やかにかつリアリティに満ちた内容で描き出されており、通常の「経済学史」テキストとはまったく異なった趣きを放っている。邦訳と訳者解説も周到であり、ぜひ一読を推奨したい。
- 2 ジョナサン・ハスケル氏が口火を切っているのは、現代の資本主義における富（利潤）

の源泉が有形資産から「無形資産」（特許や著作権などの知的資産、ヒトがもつスキルや能力などの人的資産、ブランド力や顧客情報などをふくむいわゆるビッグデータなどその種類は多岐に及んでいる）へと大きく変質を遂げてきており、その現状をどう把握すべきかという新たな問題群にほかならない。氏によれば、そこには格差拡大の方向に働く力と、いわゆるスビルオーバー（波及）としての特性をつうじて無形資産には平等化を進める力という双方向に働く力が混成している。現時点では、前者が後者よりも強いと氏は述べている。

- 3 この側面について評者は、西部忠氏による整理に完全に依拠している。西部氏は、「20年代までがシュンペーター、それ以後70年代前半までがケインズ、それ以後今日までがハイエクというように」と述べながら、さらに続けて、「この支配的理論の循環は、資本主義経済自体の変容——金融資本主義、国家独占資本主義、新自由資本主義の——にちょうど対応している」と総括している。詳細は以下の文献を参照のこと。「20世紀とはどんな時代だったのか」をテーマに「夏休みに読む30冊」について書かれた、「20世紀資本主義と三人が描いた理論の循環」、『経済セミナー』（日本評論社）、547号、30-32頁、2000年。

- 4 第二部第四章は「21世紀と経済学の三巨星」と題されているが、わずかに7ページの分量しか割かれていない。読者自身がみずから思考していくべきという著者からのメッセージと前向きに受け止めてもよいが、シュンペーター、ケインズ、ハイエクという「経済学の三巨星」の経済思想・理論をどのように現在・現代の「21世紀」にむけて総合化していけばよいか、現代経済思想史家である著者独自の提言と方向性をもっと積極的に提示されてもよかつたはずだ。ここでは、シュンペーターとケインズの理論を「イノベーションと需要の好循環」として統合的な形で理解する吉川洋氏（東京大学名誉教授）の研究成果が紹介されるに基本的にとどまっている。「他者からの援用」が「他者との相互交流」ではなからう。

また本稿冒頭において第二部での著者の最後の言葉を掲げておいたが、なぜ、「『他者』との切磋琢磨によってみずからを向上させる態度を身につける以外にはない」と断言することができるのであろうか。こうした発言の根拠とはいったい何であらうか。「以外にはないのではないのでしょうか」という著者による柔らかいが明確な「断言」口調に対し、評者はいささか強い違和感を覚える次第である。「20世紀経済学をつくった」三巨星からの「示唆」は本当にそれだけにとどまるものなのであろうか。「経済思想の多様性」という氏のスタンスからすれば、偉人らの示唆は豊かな多様性に当然ながら満ちているにちがいない。

- 5 シリーズ第5弾となる『欲望の資本主義』は、一般読者には馴染みの薄い経済人類学者カール・ポランニーと制度派経済学の始祖ヴェブレンの経済思想に光が当てられている。新訳『大転換』の「序文」にノーベル賞学者のジョセフ・スティグリッツが寄稿し、スティグリッツの師の故宇沢弘文自身は主流派経済学研究からの転向後はヴェブレンの制度主義に高い学問的関心を抱いていた。第5弾への若干の不满を述べるならば、本書で登場する各論客がポランニーとヴェブレンの経済思想をどう理解し、現代に活かそうとしているのかというインタビュー回答がいささか断片的であることだろう。紙幅の制約もあり致し方ない面もあるが、なぜポランニーとヴェブレンの両者を現代において取り上げるのがか読者には分かりにくいのではないか。著者の丸山氏が「おわりに」で長めの解説文を寄せて

はいるが、本来ならば、本書に登場する各論者自身の言葉でより多くを語ってほしいところだ。

なお現代の経済学界を代表するひとりであるダロン・アセモグル氏（マサチューセツ工科大学教授）は本書における「根源的な問いに対する興味」として、次のようなきわめて示唆に富む見解を表明しているため、この場を借りて引用しておきたい。「10代の頃からですが、私を突き動かしたのは、根源的な問いに対する興味だったと思います。民主主義はどのようにして始まったのか、経済の起源は、経済発展の意味は、そのような問いでした。そして、これらの問いに向き合うには、学際的にさまざまな分野の視点を持たなければならぬと考え、歴史学や政治学、経済学、生物学などを学びました。野心的に大きな問いを掲げ、多様な分野を学んだことで、その問いに対する自分なりの刺激的な考え方を生み出すことができたのだと思います。それがインスピレーションの源です」（103-104頁）。さらにアセモグルは、20世紀の巨人はケインズであり、ケインズの「事象を根源的に再考した意欲と能力には刺激を受けます」と続けている。「先人」による根源的な思索と洞察を真摯に学びながらそれをどう超えていけるかも、「現代」経済学者の使命であるにちがいない。

- 6 念のためにそれらの一部を挙げておこう。水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年、ヴォルフガング・シュトレーク『時間かせぎの資本主義 いつまで危機を先送りのできるか』みすず書房、2016年、伊藤誠『資本主義の限界とオルタナティブ』岩波書店、2017年、水野和夫・山本豊津『コレクションと資本主義 「美術と蒐集」を知らば経済の核心が分かる』KADOKAWA、2017年、デヴィッド・ハーヴェイ『資本主義の終焉 資本の17の矛盾とグローバル資本主義の未来』作品社、2017年、伊藤誠『入門 資本主義経済』平凡社新書、2018年、トーマス・セドラチェック/オリバー・タンツァー『続・善と悪の経済学 資本主義の精神分析』東洋経済新報社、2018年、ジャコモ・コルネオ『よりよき世界へ 資本主義に代わりうる経済システムをめぐる旅』岩波書店、2018年、水野和夫・山口二郎『資本主義と民主主義の終焉 平成の政治と経済を読み解く』祥伝社新書、2019年、ウルリケ・ヘルマン『スミス・マルクス・ケインズ よみがえる危機の処方箋』みすず書房、2020年、ジョセフ・スティグリッツ『プログレッシブ・キャピタリズム』東洋経済新報社、2020年、レベッカ・ヘンダーソン『資本主義の再構築 公正で持続可能な世界をどう実現するか』日本経済新聞出版社、2020年、諸富徹『資本主義の新しい形』岩波書店、2020年、斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書、2020年、斎藤日出治『資本主義の暴力 現代世界の破局を読む』藤原書店、2021年、ブランコ・ミラノヴィッチ『資本主義だけ残った 世界を制するシステムの未来』みすず書房、2021年、中島隆博編『人の資本主義』東京大学出版会、2021年、中野剛志『変異する資本主義』ダイヤモンド社、2021年、そして現在5弾まで刊行中の『欲望の資本主義』シリーズはもちろぬ、そのスピノフ作品である岩井克人他『岩井克人「欲望の貨幣論」を語る』東洋経済新報社、2020年もその一冊に加えてよい。
- 7 岩井克人氏による『経済学の宇宙』は、まさに本書全体がひときわ大きな現代的意義と含み、そして射程をもつ 経済学史の書 として把握することができる。第8章冒頭にてあらためて「経済学史の存在意義」を明確にする必要性に論及しながら、氏は、とりわけアダム・スミスの古典派経済学以前の「重商主義」学説に高い評価を与えながら、古代ギリ

リシャのアリストテレスによる貨幣・資本主義をめぐる先駆的で本質的な考え方とともにそれを詳述している。岩井によれば、「『見えざる手』の働きをその中核に据えたアダム・スミスとスミス以降の古典派経済学は、まさに『重商主義』が見いだした『貨幣の自己循環論法』と『利潤の差異原理』を抑制することによって成立したのです」（445-446頁）。ここでいう「利潤の差異原理」は「資本主義の基本原則」と換言してもよい。資本主義において「利潤は差異から生み出される」のであり、そのことは氏が見いだす商業資本主義、産業資本主義、そして現代のグローバルなポスト産業資本主義においても何ら変わることはない。

とりわけ興味深いのは、岩井の「経済学史講義」プロットの後半をなす、第12章「古典派とマルクスの利潤論と産業資本主義」とそれに続く第13章「シュンペーターの利潤論とポスト産業資本主義」との理論的關係だ。氏によれば、シュンペーターの目的は、資本主義という社会機構において、「利潤がどのように発生しうるのか」を解明する「資本主義の純粋理論」の構築であったとし、それはシュンペーターが生き抜いた「産業資本主義」の時代にはるかに先駆けて現代の「ポスト産業資本主義」の時代の利潤発生メカニズムをあきらかにするものであった。資本主義的利潤はマルクスが論じた労働価値説にもとづく剰余価値論をつうじては説明されえず、とりわけポスト産業資本主義時代の利潤は、まさにシュンペーターの「革新＝イノベーション」をつうじて「他にない新しさ」としての差異を意識的に生み出していくことでしか生み出されえないのである。「産業資本主義にのみ当てはまるその『不完全な』資本主義論を、資本主義の一般理論として提示してしまったこと、そこにマルクス経済学の不幸の一つがあったのだと思います」（196頁）と岩井氏は総括している。

したがって現代のグローバルなポスト産業資本主義においても、いうまでもなく「差異から利潤を生み出す」という「資本主義の基本原則」は貫徹しており、氏によって、現代のポスト産業資本主義は「最も純粋な資本主義」の形態とみなされている。マルクスの手元に残っていたあくまで「特別な」剰余価値論にすぎないものこそ、シュンペーターにとってはむしろ資本主義社会における利潤の「一般的な」発生メカニズムを説明する原理であったのであり、マルクス特別剰余価値論のシュンペーターによる一般的な資本主義利潤論への格上げにシュンペーター独自の貢献を見いだす岩井のシュンペーター経済動学は、経済学史全体の流れをあらためて見渡すとき、そのすぐれた現代的意義と射程が再確認できるのではないだろうか。重商主義の「利潤の差異原理」を起点として、古典派とマルクスの利潤論を相対化するのがシュンペーターの利潤論であり、岩井のシュンペーター経済動学とポスト産業資本主義論なのだから。シュンペーターはワルラスの一般均衡理論を「経済理論の大憲章（マグナ・カルタ）」と称しきわめて高い評価を与えていたが、そこにある「戦略的意図」などもふくめて、やや時期的に古いが示唆に富む対談となっている岩井克人・川勝平太「シュンペーターを超えて」（『現代思想』1993年（12）、Vol. 21-13、48-69頁）もぜひ参照されたい。

- 8 猪木武徳『経済社会の学び方 健全な懐疑の目を養う』中公新書、2021年の第6章「社会研究とリベラル・デモクラシー」において、1885年2月24日のケンブリッジ大学教授就任講演でマーシャルが表明したこの"Cool heads but warm hearts"をめくって、マーシャルの経済学と経済学観をふまえた興味深い考察が論じられている。